

# 江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当・寺井克之

## 米国のベアーカンントリーとパブリックランド

米国で「ベアーカンントリー（熊生息地域）」と呼ばれるエリアがある。森林面積の広いこのような自然の生態エリアは、人為的に区画された「パブリックランド（公有地）」と呼ばれる国有地に営造物公園制度により設立・画定された国立公園や国有林とオーバラップしているケースが多い。そのような地理的生態的事情から、国立公園などを安全に管理するために、現在では各公園（州立や郡立や市立でも）によってそれぞれ独自のベアーマネージメントを実施することがほぼ前提となっている。

## シエラネバダ山脈地域のベアーマネージメント導入の背景

カリフォルニア州の山岳地域に位置する一九三〇～四〇年代のセ

コイア・キングスキャニオン国立公園（SEKI）では、集客目的に餌付けをしてクマにサーカスのようなことをさせていた（写真<sup>1</sup>）。その後、クマは「ヒトとの適度な距離感」を失い、ヒトや施設に大きな危害を加え始め問題化していた。そのため、一九三八年には場当たり的にわなでクマを捕らえ山奥に移動し始め（同時に多くのクマを駆除し続けていた）、一九四七年に始めた夜間ごみ収集によってクマとヒトとの遭遇を許容範囲のレベルまでなんとか減らすことができ、一九五〇年代から試験的に「野生生物管理」の視点から幾つかのクマ対策

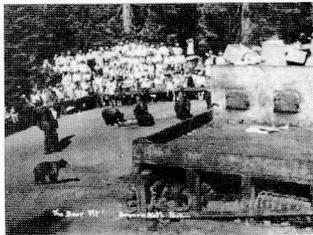


写真1 “公園のアトラクション”として、野生のクマに餌付けをしていた。Challenge of the Big Trees, p.179

を試み始めた（まだ制限なく多くのクマを駆除していた）。SEKIでは一九七〇年代になってようやく組織的なクマ対策導入を検討し始めた（同時に計画的で継続的なクマ生態研究も義務付けられるようになる<sup>1,2</sup>）。

同じシエラネバダ山脈域内に位置するほぼ同時期に設置された「SEKIの双子の公園」のヨセミテ国立公園（YOSE）でも、クマ問題とその対応は同じ年代に同じような経緯をたどっていた。各地の公園でバラバラにクマ対策の試行錯誤をしていた状況から、一九七五年に国立公園局がYOSEにおいてクマ対策に着手することが決まった<sup>3</sup>。そして二〇〇年には、YOSEとSEKIやインヨー国有林が「シエラ合同クロクマガループ」を結成し、各管轄境界を越えたクマ問題の統合的な管理協力体制が整備されるようになっていった<sup>3</sup>。

ここで、米国立公園局の野生生物管理の鍵となる思想的な背景を少しだけ押さえておきたい。一九六三年に当時の内務省長官（S. L. ユードル）に報告された「レオポルド・レポート」が、米国立公園における科学的見地に依るさまざまな

な野生生物・資源管理手法の拠所や自然科学（研究・調査）部門の基盤の礎となっている<sup>2</sup>。この大きな功績が野生生物管理の転換点となった。また、「近代公園管理のバイブル」として知られているこのレポートは、当時、国立公園局に設置された野生生物管理諮問委員会長のAldo Starker Leopold等による報告書であり、彼の父Aldo Leopoldが近代環境倫理学や自然保護の発展に大きな影響を与えた「科学的野生生物管理の父」と称される人物であった<sup>2</sup>。このような、野生生物管理手法の「パーソナルな思想的系譜」が背景にある。

## ベアーマネージメントの五つの基本対策項目とその連携

一九七〇年代当時に挙げられたベアーマネージメントは、①人為的な食料源の排除②クマ対策に関するビジターと職員の教育③適切なクマ対策関連規則の執行④実際に有効なクマ対処手順の実施⑤クマに関する事件とその対処をすべて網羅する正確で迅速な報告手順の構築、等の五つの基本対策だった<sup>1</sup>。ただし、単体の対策を個々に実施しては効果が薄いので、相互の

連携が重要になる。それは、知能が高く要領の良いクマは、対策に穴があれば「モグラたたきゲーム」のように移動し「やさしい獲物」にターゲットを次々と替えていくからだ。そのため、基本対策①②③（予防的手法）の「ヒトをマネージメントすること」と基本対策④（対処的手法）「クマをマネージメントすること」を両方同時に徹底することが、それぞれの対策の相乗効果をもたらすためには不可欠なようだ。加えて基本対策⑤の「迅速な情報共有」が、組織的なクマ対策を効果的に実施するために重要な要素となっている。米国立公園局は、これら五つすべての基本対策を連携して持続的に行うことで、クマ対策の実績を積み重ねてきた歴史がある。

### 省庁間委員会—IGBC—のクマ対策認定製品制度

基本対策①に対する具体策の一つは、利用規則として食料などはキャンプ場内に設置された認定機関によつて承認された頑丈な鉄製の保管庫に入れ、留め金で施錠することだ。このような施設・製品は、米農務省林野局の管轄で、Interagency

Grizzly Bear Committee (IGBC・林野局と内務省国立公園局・魚類野生生物局・土地管理局・米内地質調査所と各モンタナ・ワシントン・ワイオミング州の野生生物管理部門やカナダ野生自然庁などで構成する協議機構)の「防クマ製品評価・認定プログラム」により品質保証され、公有地での使用が承認されている。材質や形状が頑丈に作られているだけでなく、器用で頭の良いクマでも開けられない施設の仕組みも付いた構造になっている。国立公園や国有林などのパブリックランドやその周辺のベアーカントリー域内の市町村でもこの認定製品を使用することが推奨あるいは義務付けられている。当然、広大なウイリダネス地域を数日間(一〜五日)バックパッキングする際もクマ対策の規則がある。例えば、シエラネバタ山脈地域の国立公園や国有林では、ベアー・キャンスターと呼ばれる「防クマ食料品容器(IGBC認定製品)」にすべての食料を詰め込みバックパック内に収納し、野営する際はテントから約二五〇m離れた場所に置いておく(写真2)。これは、クマから食料を奪われるのを防ぐだけでなく、テ

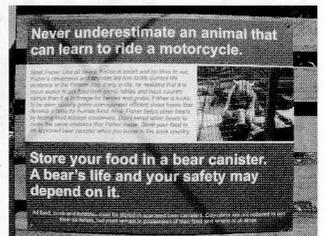


写真2 SEKIでは、クマがいかに頭の良い動物かを示し、利用者に対しクマ対策の注意喚起をしている。

トへの直接的なクマの襲撃を回避することに役立つ。あるいは(クマは木登りが得意なのだが)、テントから少し離れた木の枝に吊るす方法もある(一般には習得が難しく、SEKIやYOSE内では効果があまり無い)。また、必須ではないが、緊急避難用の唐辛子成分が入った環境省(EPA)認定ベアー・スプレーも推奨されている(IGBCはこの製品の品質を保証する機関ではないが、携行を強く推奨している)。これはあくまでも、瞬時にクマを怯ませる目的の「回避用」アイテムであつて、銃ではないので「撃退用」ではない。他に、電気柵という手段もある。

アメリカの国立公園では、このようなクマ対策製品認定制度も含む個々の具体的なクマ対策が連携し合い、徐々に専任のクマ対策スタッフを増員しながら組織的に粘り強くそれらを実施することで、大きな成果を生んできたようだ。

#### 参考文献

- Zardus, J and Parsons, J 1980. 'Black Bear Management in Sequoia and Kings Canyon National Parks', *Bears: Their Biology and Management*, vol. 4, pp. 195-200. A Selection of Papers from the Fourth International Conference on Bear Research and Management, Kalispell, Montana.
- Dilsaver, LM and Twee, WC 1990. 'Challenge of the Big Trees', California, Sequoia Natural History Association Inc.
- Madison, JS 2008. 'Yosemite National Park: the continuous evolution of human-black bear conflict management', *Human-Wildlife Conflicts*, vol.2, no. 2, pp. 160-167.
- IGBC 2020. 'Interagency Grizzly Bear Committee Bear-Resistant Products Testing Program - Testing Protocol For the 2020 Testing Season', viewed 25 Aug 2021, <[http://igbconline.org/wp-content/uploads/2020/01/01\\_2020-FINAL-testing-protocol-1.pdf](http://igbconline.org/wp-content/uploads/2020/01/01_2020-FINAL-testing-protocol-1.pdf)>.
- IGBC 2017. 'Interagency Grizzly Bear Committee Bear Spray Guidelines 2017', viewed 25 Aug 2021, <[http://igbconline.org/wp-content/uploads/2016/03/170629\\_bear\\_spray\\_guidelines-Rev.pdf](http://igbconline.org/wp-content/uploads/2016/03/170629_bear_spray_guidelines-Rev.pdf)>.

#### 寺井 克之●てらい よしゆき

米カンザス大学大学院修士(土地利用と環境計画専攻)。元米カンザス大学大学院研究助手(サブプライムローンに関する米住宅都市開発省資金受託研究)、元米内務省国立公園局セコイア・キングスキャニオン国立公園GISスペシャリスト、元江戸川大学非常勤講師、江戸川大学国立公園研究所客員研究員、豪タリフイス大学大学院(統合水管理専攻)留学、豪クイーンズランド大学大学院(地理情報科学専攻)留学など。